

「七高僧③曇鸞大師について」

これまでの過去二回で、七高僧の第一祖・龍樹菩薩と第二祖・天親菩薩についてお話ししました。

第一祖の龍樹菩薩は南インド出身で紀元 2～3 世紀頃に活躍され、「難行道」と「易行道」を明らかにされました。

第二祖の天親菩薩は北西インドのガンダーラ出身で紀元 5 世紀頃に活躍され、他力の一心を明らかにされました。

今回の曇鸞大師は第三祖に当たります。

紀元 476～542 年頃、5～6 世紀に活躍されました。天親菩薩よりちょっと後の時代です。これまでの七高僧のお二人はインドでしたが、曇鸞大師は中国の南北朝時代のお方です。

北魏時代には、中国三大石窟の中でも有名な雲崗（岡）や竜門が造られるなど仏教が盛んでした。曇鸞が生まれた当時には中国で浄土三部経が訳されたり、龍樹菩薩の『十住毘婆沙論』や天親菩薩の『無量寿経優婆提舍願生偈』（『浄土論』）が訳されたりして、大乘仏教が栄えていました。

曇鸞大師は靈山信仰の厚い五台山の近く、北中国・北魏の中国山西省大同府雁門のお生まれで、十

五歳の時に五台山で出家され、四論（『中論』『百論』『十二門論』『大智度論』）・仏性論（仏性すなわち如来蔵（＝すべての人の内面に存在する仏陀になりうる可能性）を体系的に説明する大乘の論書）に通じていました。→「一切衆生悉有仏性」

五台山は、2009 年にユネスコの世界遺産にも登録されている聖地です。

当時の北魏の五台山は仏教研究の中心地であり、曇鸞はこの山で仏道の修行にはげみ、龍樹菩薩の著した『中論』『十二門論』『大智度論』などを学びます。

ところが『大集経』という大乘の経典を解釈している途中で病気になってしまいます。

そこで、勉強を完成させて健康を保つため長寿を求めて、不老長生を説く道教の仙経（仙人の伝える経典）を授かり、仏教の勉強を中断して、道教の呪術を学び始めます。

50 歳の頃、南朝の梁の国（江南）の南京に旅をした曇鸞は、梁の武帝に許されて道教の第一人者

といわれた陶弘景という道士に会って、道教の経典である仙術の奥義の書十卷を伝授されます。

「これで長生きして仏教研究が続けられる」と喜び勇んで帰国の途についた曇鸞は、途中、洛陽の都に立ち寄ります。

その頃、洛陽にはインドから経典翻訳のために中国に来ていた菩提流支三蔵がおられて、北インドからシルクロードを通過して北魏へ持ってきた多くの経典の中国語訳に努めておられました。天親菩薩の『無量寿経優婆提舍願生偈』（『浄土論』）を中国語に訳されたのも、菩提流支です。曇鸞が菩提流支に得意気に仙術の書を見せると、菩提流支は大地に唾を吐き捨てて、

「少々長生きして何になる。すみやかに生死解脱の真の長生不死の法を求めよ。

限りない生命を得る真の不死の書はこれだ」

と言って、『観無量寿経』（『浄土論』という説もある）を示されました。

不老長寿の修行をして 200 年生きても 201 年目には死が訪れるけれど、菩提流支の『無量寿』が説かれた経典には、無量のいのちが説かれています。

阿弥陀という言葉は、アミターユスすなわち永遠のいのちとアミターバすなわち無限の光という意味から来ていますが、長い短いという生死を超えた、無量の命を持つ仏様が阿弥陀様です。

私達凡夫を救う阿弥陀如来のおはたらきは、限りが無いのです。

曇鸞はその浄土の経典を読み、深く感ずるところがあり、悔悟して仙經を焼き捨て浄土教に帰依し、念仏三昧の生活に入ります。（「三蔵流支授浄教 梵焼仙經帰楽邦」）それまで自分の抱いていた限りあるものの小ささに気づかれ、阿弥陀如来の無限のお徳を知らされたのです。

こうして曇鸞大師のおかげで、浄土の教えが中国に根をおろすこととなりました。

彼の徳の高さは四方に伝わり、梁の武帝は北に向かって「鸞菩薩」と呼んで篤く敬い、魏王も「神

鸞」と敬ったといわれています。（「本師曇鸞梁天子 常向鸞処菩薩礼」）

曇鸞は、井州の大巖寺、汾州石壁にある玄中寺などに住まれ、さらに汾州・平遥山の遥山寺へ移られて、東魏の興和 4 年（542）67 歳で往生されました。

曇鸞大師は、天親菩薩の『浄土論』を注釈した『浄土論註』（『往生論註』『論註』とも）を著し、「自力・他力」を明らかにして、他力の道を勧められました。（「天親菩薩論註解 報土因果顕誓願」）七高僧の中で、「他力」という言葉を最初に用いられたのは、曇鸞大師です。

七高僧第一祖の龍樹菩薩は『十住毘婆沙論』の「易行品」で、大乘仏教をやさしく〈不退転〉すなわち決して後戻りしない境地に至る「易行道」と、長く苦しい修行を経て〈不退転〉に至る「難行道」の二つの道に分けて、「易行道」をすすめてくださいました。

曇鸞大師は、この龍樹菩薩の「難行・易行」の二道を「自力」と「他力」とによるとして、易行道とは阿弥陀如来のおはたらき、すなわち「他力」によると説かれました。「難行道」は「自力」、「易行道」は阿弥陀如来の本願力による「他力」です。

天親（世親）菩薩が書かれた『無量寿経優婆提舍願生偈』（『浄土論』）は『無量寿経』の注釈書なので、この『浄土論註』（『往生論註』）は再註釈に当たります。

→「経・論・釈」とは：仏の教説である〈経〉と、その教説をインドの学者が註釈・解説した〈論〉と、漢訳された経および論を中国などの学者が解釈した〈釈〉の 3 種のこと。釈とは経典や論書の意味を解説する註解文献をいう。（『岩波仏教辞典』）

次回以後お話する予定の七高僧の第四祖、道綽禪師や第五祖の善導大師、さらに第六祖である日本の源信僧都や第七祖の法然上人は、この『浄土論註』によって論を進められました。

曇鸞大師は、末法、すなわち教えだけが残り、人がいかに修行してさとりを得ようとしてもとうてい不可能な時代、仏法が衰退する時代には、他力の信心による浄土往生による成仏以外にないと説

き、すべては他力のはたらきであると論証しました。

(→正法・像法・末法＝三時：釈尊滅後の時代を正法・像法・末法の3期に分けた時代区分。
正法＝釈尊の死後500年または1000年の間のことで、教えと教えを実践する人とこれによってさとりを開く人のある時期。

像法＝仏の教えとそれを学ぶ修行者は存在するが、もはやさとりを開く者はいない時代。

末法＝教えだけが残り、さとりを開く人がいなくなる時代。仏法が衰退する時代。

日本では永承6年(1051年)で像法時は終わって末法に入ると考えられた。

平安時代の後期に末法の時代を迎えたこととなり、七高僧第六祖の源信僧都や第七祖の法然上人を始め親鸞聖人など多くの僧は、当時の時代に不安を感じていた人々に浄土の教えを説いた。)

親鸞聖人の「親鸞」というお名前は、第二祖の天親菩薩の「親」と、この曇鸞大師の「鸞」を取ってつけられました。

ここからも、親鸞聖人が七高僧の中でもいかにこの天親菩薩と曇鸞大師のお二人を敬っておられたかがわかると思います。

『高僧和讃』の中でも、最も多い三十四首が曇鸞大師について詠まれたものであり、親鸞聖人は七高僧の中でも曇鸞大師の影響を最も強く受けたといわれています。

『正信偈』4頁上段5行目～

ほんじどんらんりょうてんし じょうこうらんしよぼ さらい
「本師曇鸞 梁 天子 常 向 鸞 処 菩薩 礼」

ほんじどんらん りょう てんし つね らん どんらん む ぼさつ らい
<本師曇鸞を、梁の天子は常に鸞(曇鸞)のところに向かって菩薩と礼したてまつる。>

ほんしゅう そし どんらんだいし ちゅうごく りょう ぶてい つね ぼさつ あお らいはい かた
《本宗の祖師・曇鸞大師は、中国の梁の武帝が常に菩薩と仰がれ礼拝されたお方です。》

『正信偈』4頁上段7行目

さんぞうるしじゅじょうきょう ほんしゅうせんぎょうきらくほう
「三蔵流支 淨 教 梵 燒 仙 經 帰 樂 邦」

さんぞうるし じょうきょう さず せんぎょう ほんしゅう らくほう き
<三蔵流支が淨教を授けたので、仙經を梵燒して樂邦に歸す。>

ぼだいるしさんぞう ぶつきょうがくぞう じょうど きょうてん さず せんぎょう どうきょう せんじん
《菩提流支三蔵(インドの仏教学僧)から浄土の經典を授けられたので、仙經(道教の仙人の

經)を焼き捨てて、阿彌陀仏の浄土の教えに歸依されました。》

樂邦とは、楽しい国という意味で、ここでは阿彌陀仏の浄土のことです。

『正信偈』4頁上段9行目

てんじんぼさろんちゅうげ ほうどいんがけんせいがん
「天親菩薩論 註 解 報土因果顯 誓 願」

てんじんぼさつ ろん ちゅうげ ほうど いんが せいがん
<天親菩薩の『論』を註解して、「報土の因果は誓願による」とあらわす。>

てんじんぼさつ じょうどろん ちゅうしやく かいせつしよ おうじょうろんちゅう か じょうど ほうど おうじょう
《天親菩薩の『浄土論』を註釈して解説書の『往生論註』を書かれて、浄土(報土)に往生す

る因も果も阿弥陀仏の誓願（四十八願）によることを明らかにされました。》

『正信偈』 4 頁上段 左から 2 行目

おうげん えこう たりき しょうじょうしんゆいしんじん
「往還廻向由他力 正定之因唯信心」

〈往還の廻向は他力による。正定の因はただ信心なり。〉

《往相回向(浄土に往生すること)も還相回向(迷いの世界に還って人々を救うこと)も他力の廻向

であると示されました。浄土へ往生し、仏となるべき身に定まる(正定聚)ための因は、ただ

疑いなく誓願を信じる信心ひとつなのです。》

『正信偈』 4 頁下段 1 行目

わくぜん ほんぶ しんじん おこ しょうじ しょうじそくねはん
「感染凡夫信心発 証知生死即涅槃」

〈感染の凡夫でも信心を發したなら、生死すなわち涅槃であると証知せしむ。〉

《惑いで汚染された煩惱具足の凡夫(人々)でもこの信心を得たなら、生死の迷いのままだが涅槃で

あるという、仏のさとりを開くことができるのです。》

この「証知生死即涅槃」という言葉については去年のお盆にお話ししましたが、これは「煩惱即菩提」「不断煩惱得涅槃」(正信偈 2 頁上段 6 行目) と同じ意味です。

『正信偈』 4 頁下段 3 行目

ひつむりょうこうみょうど しょうじゆじょうかいふけ
「必至無量光明土 諸有衆生皆普化」

〈かならず無量光明土に至れば、諸有の衆生を皆あまねく化すといえり。〉

《必ずはかり知れない光明の浄土に至って仏となり、あらゆるすべての迷いの衆生(人々)を

みな導くことができると述べられました。》

諸有というのは、あらゆるすべての、という意味です。

以上、今日は七高僧の第三祖、曇鸞大師についてお話ししました。

これで今日のお話を終わらせていただきます。ありがとうございました。